

高木市長の



しおかぜ通信

これから夏も本番を迎える季節となりました。皆様には、夏祭りや花火大会など、この時期ならではの行事をお楽しみいただきたいと思います。

さて、五月二十三日には北木島で「第七回島の大運動会」が開催され、七つの島の方々をはじめ、約三千人が参加され、大いに盛り上がりました。今回も、笠岡諸島からの主張をはじめ、大きな石臼を使つての餅つきや、各島がそれぞれに趣向を凝らした仮装大賞などがあり、多くの市民の皆さんと共に楽しむ機会を得ることができました。今後も、笠岡諸島の絆が一層深まるものと期待しています。

六月には、島を有する自治体が全国から集う協議会の総会行事に参加するため、宮城

県気仙沼市を訪問しました。気仙沼市の人口は約六万人で、太平洋岸に面した海域は豊かな水産資源に恵まれ、遠洋マグロ延縄漁船の船舶数日本一の水産都市として知られています。

新鮮な魚介類の加工品も豊富で、マンボウの酢の物や、ネズミザメの心臓の刺身などをいただきました。瀬戸内海とは違った食材に驚かされると共に、水産資源の奥の深さをあらためて感じました。

会議では、財政基盤の確立、島の産業振興・観光開発や医療・福祉の増進など、幅広い分野で真摯な討議が行われました。こうした機会を経て、全国の島の現状を知り、連携していくことで、これからの笠岡諸島の振興に役立てていきたいと思えます。

笠岡市長 高木直矢



Hello, amy ハロー、エイミー



私がビーチでのジョギングから戻ってきたのは朝の六時頃でした。家の方へ戻っていると、私のお隣さんのカズコ

がパジャマ姿のまままで玄関先に立ち、近所の白髪の男性と話をしていました。今まで一度もパジャマのままのカズちゃんを外で見たことがなかった私は、何かただならぬものを感じました。

「何かあったの?」「カワタさんが亡くなったの。」彼女は百メートル先の小さなブリキの家を指して言いました。「いつも港に立って潮の満ち引きを眺めていた人?」

「そうよ。」近所の人たちが彼の家から物をもって出入りしたり忙しそうにしていました。

四方の波形の壁は青く塗られ、赤い屋根からは雨樋が家の一角から下ろされています。六畳一間の真ん中にぶらさがっている裸電球に電気を流すケーブルが、外の電信柱から屋根の中央の方にかかっています。二本の竹の棒に洗濯ひもがかけられ、そこへ干したままになっていた服を取り込む女性の姿を、私は見ていました。

彼とは、たくさんの「こんばんは」とたくさんの「笑顔」を交わしてきましたが、彼の名前しか知りませんでした。彼はひよろつと背が高く、前を通り過ぎていく人たちにただ笑顔でうなずくばかりでした。小さな部屋から暑さで外へ押し出され、明けても暮れ

ても港に立ち続けていました。海辺にしゃがみこみ、潮の満ち引きを見つめている時、彼は海のリズムと調和しているように見えた。日の出と日没の頃にできる山の影を見つめている時、彼は誰よりも自然と調和しているように見えた。彼は港から全てを見つめていました。彼が見過ごす物は何



ひとつありませんでした。私と同じように、彼は漁師が港から夜の薄明かりの中へと出て行くのを見ていました。魚が夜の暗闇の中で飛び跳ねる音や、私たちの住む小さな島を通り過ぎ、大きな港へと向かうタンカーのエンジン音。

乗組員が夜休むために定期貨物船のいかりを海底に降ろす音も彼は知っていました。これらは、私たちが無言のうちにも共有してきたものです。お互いのことを何も知らない二人の人間。けれども、その二人が同じことを楽しんできました。私たちは生命のリズムを共有しました。

どんなに小さな人間でも、私たちの生命を育み、記憶を残してくれず。その人がいなくなるというものは、過去が現在に価値を与え、不変の思い出となるのです。